



アカシア俳句会



令和六年 冬季・新年俳句会「句評」 冬・新年の季語を含む作品一〜五句

一、「特選句」 選定句評

○氷雨降る箱根路駆けてたすき継ぐ

加龍恵子

◆テレビでずっと観ていましたが マラソン大会の様子がすっかり浮かんできました

楠野圭子

○地震事故正月飛びて日々虚ろ

加龍恵子

◆「一年の計は元且にあり」 まさかの目の前の暗転 その心情の描写が素晴らしい

前田秀一

○除夜の鐘戦禍に耐えるウクライナ

都 福仁

◆何処にても戦は要らぬ 人は解っているのに 知性は感情に勝てぬのか この現実は無念！

喚起協力が必要

網 佑子

◆思いを寄せることしか出来ない国際情勢ですが 言霊となって広く届く様になればよいとの

思いを込めて特選句にしました 元永悦子

○野良猫と親しくなりて日向ぼこ

中野亘子

◆小春日和の午後のひとときの光景が鮮やかです

吉澤志保子

○冬りんご一口大にて供されし

中野亘子

◆簡潔に描写された明るく美しい情景 心づかいに対する感謝のなかに一抹のさびしさが感じ

られる 山家由紀

○去年今年エプロンはずし昼けり

中野亘子

◆さらりとした言葉の中にお節はできた おそばをいただいてひと眠りしよう

佐藤茂弘

◆大晦日まで気忙しく働いていて 年明けを迎える エプロンを外して畳むという表現に色ん

な想いが感じられてすばらしいです 野本展子

○文化勲章身近になりし年暮るる

山家由紀

◆たしかに文化勲章は身近になったが 彼の努力は凄い テニスの世話でも市民のパワーの怖

さを感じる 戸堂博之

○煮大根湯気もごちそう星降る夜

山家由紀

◆澄んだ冬空には沢山の星が 家の中では湯気が立ち上りあたたかな夕餉が始まります うま

く切り取られ 煮大根がいいですね 加龍恵子

○正月の集い戦の国もありて

山家由紀

◆家族揃う正月の宴で思うのは戦争中の国のこと 大災害を得た地のこと 他者を思いやる作者の心情を思う 中野亘子

○元日の大地震われは酒のみて

山家由紀

◆「われは」、のみて」を平仮名にすることで 句の意味が良く伝わると思いました 藤井光正

○枝混（こ）むもすつと宇宙へ伸ぶ一枝

網 佑子

◆素直な表現で 情景とそれを眺める気持ちがこちらにもすつと伝わってきました 吉田以登

○ひとひらの雲いただきて山眠る

前田秀一

◆風も無く長閑な田園風景を上手く表現している 都 福仁

二、「編集後記」

令和五年十二月二十三日（土）正午より、「ホテル・アゴラリージェンシー大阪堺」ロイヤルホールで川淵三郎さんの文化勲章受章をお祝いしました。

年末のあわただしい時節ではありましたが、七期生三十二名を主体として体育会所属の卒業生の皆さんも含め百五十名の参加がありました。

日本センチュリー交響楽団による祝賀演奏「弦楽四重奏」はじめ高校在学中を思い出させるビデオメッセージや光景など大変懐かしく楽しい時間を共に過ごしました。

「アカシア俳句」会有志会員による慶祝俳句を中野亘子さんが朗詠披露し、網 佑子さん書作品色紙（額装）を贈呈しました。



川淵三郎氏 御礼と回顧



慶祝俳句色紙（額装）贈呈

左より 中野亘子さん（朗詠） 川淵三郎さん 網 佑子さん（書）

川淵三郎君

文化勲章受章 慶祝俳句

反骨に夢が重なり天高し

青空へサッカーボール文化の日

丁・キヤプテン三國ヶ丘に菊董る

浄らかに遂げらる偉業秋澄めり

キックして母校をみ空へ文化の日

水清く菊花漂ふ川の淵

秋天に若人はじけ賞称ふ

大菊や七期の誇りおめでとう

煌めきて受賞寿ぎ銀杏舞ふ

菊花映ゆスポーツ文化大盛り

令和五年十一月三日

大阪府立三國丘高等学校

七期生 アカシア俳句会有志



吉澤志保子

都 福仁

西村敏治

網 佑子

戸堂博之

佐藤茂弘

加龍恵子

岩崎悦子

中野亘子

前田秀一



◆「土生重次師俳句論」(**)

***小川誠二郎編二〇〇一『抄録・重次俳句論―土生重次、かく語りき―』(復刻) 扉俳句会運営委員会

《今回の学び》

俳句は描写ですよ！

九十九頁

「説明」とは「事柄の内容や意味をよく分かるように解き明かすこと」である。「事実が、『何故かくあるか』の根拠を示す」のが説明で、「物事の筋道。ことわり」の「理」にも似ている。多くをいわずとも俳句で季語を説明されたり、作者の出会った事柄やモノを説明されても、読者はまったくうれしくもおかしくもない。ましてや、もったいぶった「理屈」を聞かされてもしらけるだけである。

「俳句は描写ですよ！」と再三いつているが、俳句入門書でおなじみの「写生」とは言っていない。それでは「描写」と「写生」ではどう違うか。

「描写」とは「あるがままの姿を浮かび上がらせるようにえがき出すこと」である。「写生」とは「事物・実景を見てありのままに写し取ること」である。

前者には、表現の個性(人生経験や感性に裏付けされた)がないと「姿を浮かび上がらせる」ことは難しいだろう。換言すれば「誰もがいうようにはいわない。自分が見て、感じたことをいう」と覚悟を決めることである。

例えば、

◆背をかがめ言葉やはらか生身魂 ↓これは説明。何の言葉が柔らかかったか。それを言う。

◇おごごこの言葉やはらか生身魂

◆風吹きて波紋の及ぶ花菖蒲 ↓「風吹きて」は説明。描写すこと。

◇次々と波紋の及ぶ花菖蒲

◆風呂場より水音消へて夜の蝶 ↓季語の夜の蝶が効いている。が、「消えて」は説明。

◇ふる場より水音絶へて夜の蝶

◆ホッチキスの効かぬ厚紙春愁 ↓「効かぬ」のが「厚紙」では、薄ければ効くのかという「理」が働く。説明になってしまう。

◇ホッチキスの効かぬ書類や春愁

◆^{くちばし}嘴で押され飛び立つ鳥の子 ↓「飛び」「立つ」と動詞を二重ねるのは説明語になる。

◇嘴で押されて発ちし鳥の子

《これまでの学び》

既発行『句評』『編集後記』掲載

- ◇「俳句は叙事詩である」 季語―非凡の一節を支えるもの 令和五年『冬季・新年俳句会』
- ◇「俳句はモノに託して心を詠う文芸である」 令和四年『秋季俳句会』
- ◇「俳句は“心”や“情”を直接的に詠ってはならない」 令和四年『秋季俳句会』
- ◇「俳句は“今”をとらえた文芸である」 令和五年『春季俳句会』
- ◇「俳句は“何を詠うか”ではなく、“いかに詠うか”だ」 令和五年『春季俳句会』
- ◇「俳句は感動を詠う詩である」 令和五年『夏季俳句会』
- ◇「俳句は自然と人間との関わりを詠う詩である」 令和五年『夏季俳句会』
- ◇「俳句は『坐五』(*)がいのち」 *：『坐五』下(しも)五文字 令和五年『秋季俳句会』
- ◇「俳句は描写ですよ！」 令和六年『冬季・新年俳句会』

編集人 前田秀一

